

引出物・引菓子の語源と由来



一般的に結婚式に来て下さったお客様にお祝いのお裾分けと感謝の気持ちを込めてお持ち帰り頂く「引出物」。お招きしたお客様と縁が長く続きますようにという願いが込められています。

引出物の語源と由来は平安時代の頃、自宅に招いたお客様が帰ろうとした際に、庭につないであった自分の馬を引き出して乗って帰ってもらったというエピソードから生まれたと言われていました。

「馬を引き出す」という言葉が語源となり、宴席に招いたお客様に対して贈る贈り物を「引出物」と呼ぶようになりました。

時代は変わり戦国時代、戦での武運を祈り刀や弓矢等の武具が贈られ、それに加え「勝男武士」という意味で縁起かつぎの品や戦勝の報奨品として用いられた「鯉節」も引出物のひとつに。保存もきき栄養価も高く、武士のエネルギーの源として活用されていました。その後、鯉節の他にも鮭、昆布、お茶等様々な食べ物が選ばれるようになり、近年では、木の年輪のように長寿繁栄を願うバームクーヘンや、紅白饅頭、赤飯などが引菓子の定番商品となりました。現在では、お持ち帰り頂く負担やお客様それぞれの好みを考え、カタログギフトを選ばれる方が多くなっています。

「数珠」に込められた意味とは？



葬儀等の仏事に欠かせない「数珠」は何を意味しているのか、みなさんは考えたことはありませんか？数珠の歴史は古く、お釈迦様が生まれるよりもっと昔からあったと言い伝えられています。お釈迦様はお経を唱える際、木の実を繫いでつくった連珠の珠を一つずつ指で押して数えていました。このことによって、自身の心を静め、災いを除き、正しい方へ向かうと考えられていました。また、「南無阿弥陀仏」等のお経の回数を数える道具としても使われていたことから、数をかぞえる珠、「数珠」と呼ばれるようになりました。

また、私たちが普段手にしている数珠は、珠の数が27個や18個の一連のものが多いですが、昔から正式には108の珠が基本となっています。

私たち人間には108の煩惱があり、それは限りない欲望と執着の量を表しています。数珠の珠一つ一つが煩惱とされ、珠の中を貫いている一本の糸は、仏の心を私たちの心の中に通しています。よって、円く輪っかになっている数珠には心が円く、素直になるようにという意味が込められています。

時代とともに変化した数珠は、現在では魔除けやお守りの意味をもつ、ブレスレット等のアクセサリとして身に着けられるようになりました。